

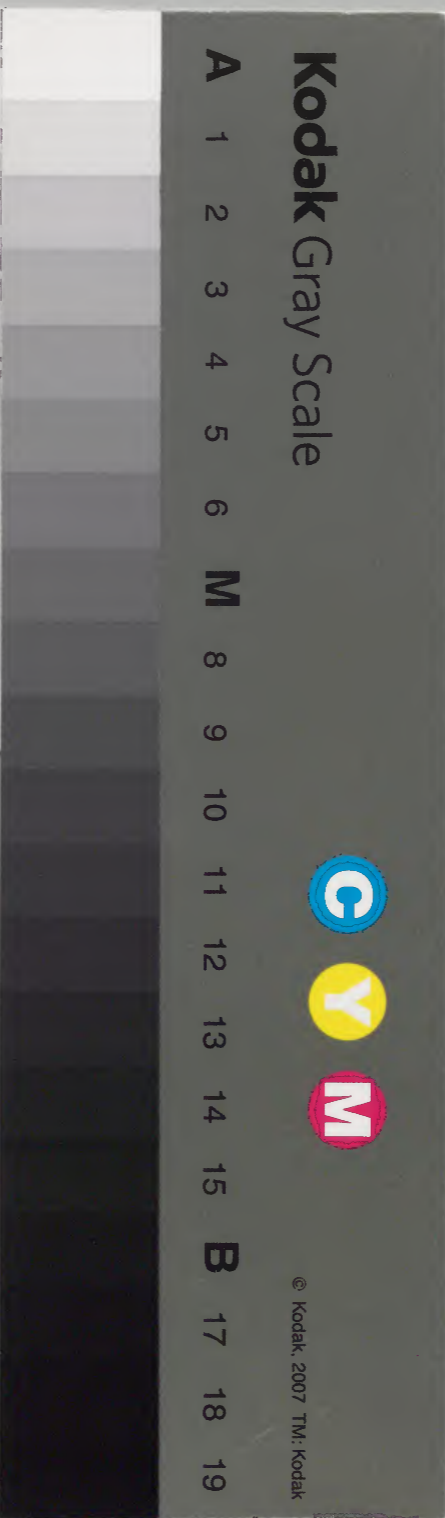
# 類聚名物考

百三

和書門類	
二七九八號	函
一一二	架
一六一	冊

和書	
二七九八號	冊
一一六	架
二九	冊

内閣文庫		
番號	和	27798
冊數	156 (116)	
函號	209	106



類聚名物考

調度之部十一



百三卷

明治十三年謄寫

蘇州名物

四十四

蘇州名物

○蘇州調度目録

銀之爪破子

標子 はりこ

鉛筒 かれひけ

新厨

茶櫃

簾 たてり

はな 籠 ご

初 あご 負籠

葛籠 つら

細 あそ づら

牛漕 うご

馬漕 うまご

矢立硯 やたてのすり

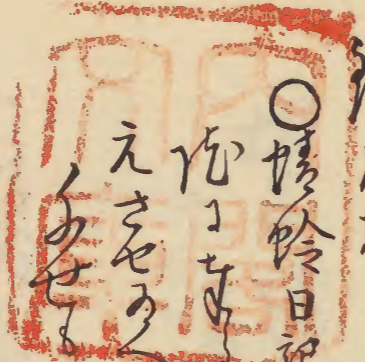


ごり

浪肌破子

あうりあうりさうじ

○懐鈴日記下 約つゝつゝ負つぎとありて 浪肌破子とて  
ゆゑにせん ちよまの角を ちえんとて 抄取原より ちえきこ  
えきまのり ちえい  
へまをさうりつ 山城のこ ちえまへ へまのり



浪肌破子

あうりあうり

浪肌破子

浪肌破子

あうりあうり

浪肌破子

浪肌破子

あうりあうり

浪肌破子

浪肌破子

あうりあうり

浪肌破子

浪肌破子

標子

己りご

破子

一名 かれひけ 袖筒

標子

和名 己りご  
かれひけ

○晴陰花中辛味袴の衣あつとよあもかれと見申れと程は  
大きあつ何あちの本たひと何あつ袴は車かきあつととと  
もうちよりあつしてひちあつとてけまそは破子やちつん  
かのあつささいいと遠うあつとよあつとと

○月夜集

新編筑志

後京極殿

我といふあつらんやこつくとへそかちなる己りごなる

行燈

今迄の書物に於ては此の如きものを見ず

行厨

今俗云辨為<sup>て</sup>旅<sup>り</sup>な<sup>に</sup>拵<sup>り</sup>も此<sup>之</sup>外<sup>居</sup>の<sup>り</sup>儀<sup>は</sup>俗<sup>に</sup>行<sup>儀</sup>  
と云<sup>ふ</sup>も<sup>は</sup>行<sup>儀</sup>の<sup>り</sup>名<sup>を</sup>楳<sup>子</sup>并<sup>の</sup>の<sup>り</sup>也<sup>と</sup>

○白氏文集<sup>廿五</sup> 宿杜曲花下律 筵輿為<sup>て</sup>臥舍 漆盃是<sup>行</sup>厨<sup>班</sup>行<sup>行</sup>  
盛茶櫃紅泥罨飯爐

*Handwritten notes in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page.*

茶櫃

茶管<sup>と</sup>の<sup>り</sup>同<sup>く</sup>俗<sup>に</sup>云<sup>ふ</sup>茶<sup>茶</sup>為<sup>て</sup>之<sup>の</sup>京<sup>を</sup>也<sup>と</sup>凡<sup>そ</sup>の<sup>り</sup>子<sup>は</sup>

○白氏文集<sup>廿五</sup>同上

*Handwritten notes in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page.*

竹

有<sup>り</sup>

○<sup>竹</sup> 竹<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>為<sup>て</sup>益<sup>集</sup>旅<sup>人</sup>の<sup>り</sup>所<sup>に</sup>ひ<sup>た</sup>ま<sup>め</sup>を<sup>人</sup>の<sup>り</sup>ひ<sup>たり</sup>

旅<sup>人</sup>の<sup>り</sup>所<sup>に</sup>ひ<sup>た</sup>ま<sup>め</sup>を<sup>人</sup>の<sup>り</sup>ひ<sup>たり</sup> 竹<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>為<sup>て</sup>益<sup>集</sup>旅<sup>人</sup>の<sup>り</sup>所<sup>に</sup>ひ<sup>た</sup>ま<sup>め</sup>を<sup>人</sup>の<sup>り</sup>ひ<sup>たり</sup>

○和名抄

竹<sup>の</sup>初<sup>名</sup> 竹<sup>の</sup>筵

*Extensive handwritten notes in cursive script, likely bleed-through from the reverse side of the page.*

そご

○平兼盛集

旅人ハありもをささむあきけをやくいづのあいのち

○七苦おぼサ  
らきておあさひてらうし  
わらひなりぬれさうい

和名旅籠  
なせん  
そご

馱餉

東温

和名お名

初

何ふご

頁籠

二の義ありハ旅籠の義を物入る昔籠成云もをす  
一ハそれとあひの持てあ之今も持はふ大坂の方言  
云ハ持と何ふこと云今東郊の言ハ何ふこれとほて  
しちお但おまの道程をさこれハ濁を平とまべ  
○持鈴ヲ記二行ののまをさうりハ  
とれりたる男のかいととりとせや何と一籠のそとをさ  
ま何つてそれハかきつてあの流うにせよ  
かこひやくかかん山うの何ふこあハそくハそくハ

○あ美難波集オニ  
三人者何ふごとりけて何れハ  
てをんて去旅籠とて何れこの先を  
り三人大よおとらきて是ハ  
たてやくお籠へりて三人何ふごを  
つてあき教はよ

つひに死なざる代志きりよおて教(り)りぬ

葉よはりぬこハ棒之慎ぬハ即為朝(り)あまかきりハ大

勇(り)を精(り)吾(り)なり矢(り)も十(り)末(り)云(り)ハ八(り)尺(り)五(り)寸(り)也(り)持(り)の(り)ハ

この(り)ハ云(り)傳(り)く(り)是(り)等(り)ハ也(り)櫃(り)の(り)棒(り)ハ(り)の(り)似(り)る(り)云(り)

○延喜式 神祇式上 御禊加ニ枚

○和名抄

*Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.*

矢立

やたて

今の世も碇のかきりよおて(り)りぬ(り) 相(り)を(り)矢(り)立(り)と(り)し(り)む(り)り(り)ハ  
碇の中も今(り)新(り)し(り)あ(り)き(り)り(り)も(り)か(り)了(り)き(り)り(り)今(り)も(り)お(り)の(り)  
さ(り)酒(り)胡(り)篋(り)ハ(り)形(り)の(り)似(り)れ(り)ざ(り)り(り)も(り)あ(り)へ(り)信(り)ち(り)儀(り)在(り)禊(り)と  
り(り)お(り)の(り)似(り)る(り)お(り)之(り)等(り)も(り)さ(り)也(り)さ(り)海(り)の(り)矢(り)と(り)立(り)り(り)も  
似(り)れ(り)か(り)く(り)か(り)名(り)付(り)る(り)べ(り)し(り)

○太平記ニ 俊基珠せりゆり中略 俊基いと涙はなれて涙多  
し(り)る(り)き(り)ん(り)人(り)神(り)を(り)思(り)ふ(り)さ(り)ぬ(り)あ(り)り(り)る(り) 碇(り)も(り)と(り)の(り)く(り)や(り)て  
也(り)碇(り)前(り)の(り)所(り)あ(り)ハ(り)碇(り)の(り)う(り)ら(り)な(り)少(り)か(り)き(り)髪(り)の(り)髪(り)と(り)切(り)押(り)切(り)て(り)お  
方(り)の(り)人(り)も(り)老(り)え(り)り(り)也(り)一(り)等(り)も(り)て(り)ゆ(り)え(り)が(り)も(り)海(り)の(り)く(り)あ(り)光(り)懐(り)へ(り)入(り)て  
なき(り)沈(り)た(り)る(り)極(り)と(り)こ(り)り(り)も(り)も(り)と(り)老(り)く(り)



*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*

葛籠

つら

あまそつらなる物とつらとひりを今形よそ革きても  
竹芦の敷の河つらまゝに漆板終あそせもつらとら  
うはき小るゝを又庫とらり

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]*







自分考て食事を一家の志ともかくめ入るほりさ我も喰はば  
其尚用よふ安りて家内七人のり多め

油草

○和名抄十四油草唐式名鴻臚蕃客等器四油草及雜物並令

少厨監支造

兼小油草ハ油紙すまハ油の字後なまて振りのありき用  
るものく又ハありも灯基堂のおきなりとも用意く

○造作具 工匠刻鑿具

掾撃手

いひ

大槌

おろろぢ

○和名抄造作具

算糸文云舟人以大槌為掾撃

漢語抄云阿比

柀揆

さいづり

方推

槌

○和名抄造作具

算糸又云方推直追及字

謂之柀揆

紋葵二音漢語抄云散伊

煎針

ちりこ

煎針

鐵槌

かあづち

鐵日

○和名抄造作具廣推云鐵於切及和名鐵槌也加奈都知

○今之少はこれハ今も少令推手ユ匠のつゝふ爲之

又鐵ハ同訓あれともそれハ今も推練つちなれハ是

○味子と同訓からぞ日訓吳物ク

鏈

かあづち

○これハ推作のつゝふ令謎ヲてつゝのみユゆの吳と云之

○和名抄 鐵推吳 四声字苑云鐵直追及今業即鐵推也 亦鉄器也

○子景鏈都同功音推鍛也

横槌

よゝづち

○和名抄終集廿二 柳子谷よて鬼子彦と父追うけ

まゝめて推のりはあつらひて見れハ色赤き子朱の如

しも目のあは又額の目をはひろトて身は乃ふ

とは齒ニツちはは齒ニツ有父嫡子と呼て横推持事れ

としハ兄子呼て父りゆのは付と推ともつて志をり

よ打てたき鉄らんと



竹力 和名  
何とひえ 昔金銀所

カ子 和名  
かこ

汗 和名  
あせり  
かあきり 字兼  
曲尺 漱玉

涎 和名  
ちく涎かき

珍 和名  
かまふへ

泥瑠 和名  
こて

鬚 和名  
のこ

誰 和名  
きり

觚 和名  
くどり

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*



痰 和名  
もろ

瀝 和名  
たろ

瀉子 和名  
やろ

痰銅 和名  
かろ

痰刀 和名  
たろ

繩 和名

準繩 和名  
じゆんじゆ

繩 和名  
じゆん

繩 和名  
じゆん

繩 和名  
じゆん

淡磔 和名  
かきしき

鑿 和名  
いかし

輓轡 和名  
ろくろ

輓轡

ろくろ

○三國志

魏明帝立凌雲觀誤先針撈乃以籠盛章誕輓轡  
引上書之去地二十五丈既下鬚髮皓然還詰子弟直絕此法

陶鈞

つろろくろ

○文撰東方朔畫贊

夏侯孝若

莫不守匠陶鈞而羣文緝熙○注

漢書雒陽上書曰聖王制世御俗獨化於陶鈞之上音義曰陶家

名橫下圓轉為鈞

陶家輪

つちろく海

土轆轤

○維摩經六 不思議品六又舍利弗住不可思議解脫菩薩漸取三千大千世界如陶家輪著右掌中擲過恒沙世界之外其中衆生不覺不知己之所往又復還置本處都不使人有往來想而此世界本相如故

○維摩經九 見阿閼仙品三 妙喜世界成就如是無量功德上至阿迦臈叱天下至水際以右于漸取如陶家輪○注梵本云如漸泥今言如陶家輪明就中央漸取如陶家輪下不着地四邊相絕也

此ちろく海

運釣

瓦圓孔

○管子 不明於則而欲出号令猶立朝夕於運釣之上

○之ろく運釣ハ泥工圓轉 爲也ト泥セリ今俗トハ土轆轤トシク

○揚子菴外集同孔 瓦人為管注陶人為瓦模圓轉以成坏瓦器之模物相似若相倣然因名瓦方往切音倣易云瓦圓天地之化喻造化之循環無端若瓦模也董仲舒云如泥之在釣、昂瓦也在詩一氣轉鴻釣謂造化也云々○一本瓦倣作器物、相倣如一也

○文選西征賦潘岳注 由此觀之士無常俗而教者定式上也遷下猶釣善本 坻埴注漢書董仲舒曰上之化下下之從上猶泥之在釣 唯甄者之所為○如淳曰陶家作器釣上

志のり

修羅

大石帝釋

○方物なるの悪決五 石引ものを志のりと云ハ何のぞ たいやく  
と勅うまのり修羅は何のまはみりしを扱て名つくくと云こ  
かやのたそあれりかあの遠ひは苦からぬよや建仁寺  
ちのよ表虎とらふ内りつあ文選一と云心

鬘マシ 和名  
まけ

澹タン 和名  
あり

錯サカサマ子 和名  
はな

木賊 和名  
しき

掠ハ葉 和名  
むくのり

釘 和名

潛 和名 活の釘  
きりきり びきん

拍 和名 びきん大釘  
のきりきりのきり

杓 和名  
きりきり

鋸

のきり

○南嶺遺稿 四 延喜太神宮式 鋸と後世のこきりと云  
たるはいりきり是ハ今云何とすもひたると云へり即杓の  
鋸とて乃保業利ありて延喜式ハ真字にて鋸とて  
即ハ延喜式ハ乃保業利と云へり此の  
せてハ前ハ川の木の木のきりかきりそのハ木  
多し又保業利ハ木と云へり此の木の保業利も  
りり小斧といふ木の鋸と云へり此の木の鋸も  
○今案ニ鋸の別の名ありりハ既ハ和名抄ハ此の  
りきりとも云へり此の総上総の方言ハ此のこきりと云

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

排索

たぐり

ゆい

火郡再書

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

○宗祇旦國記上安房ふこいあしう ちのあふのこせりゆとつる

山向 岩の岩よをそれてありうさあよらのるるおどろ

何してまをらる鑿のゆらちんまつれハ 誦階

こやあひく岩のあしをそれて 誦階ハかろしんる

○今葉よせよ本現の持大誦をいかにとつりてそれ

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

鋸 和名  
のこぎり



螺鈿

らでん

らひ

螺鈿とは今俗に云青貝のすしを古き相のらひするを鞍  
 有らひするも貝細工の木地へ入り入て地さびとして上とをり  
 りりきとをりやハ柄貝ともいふ之螺鈿の名を今細工と書るも  
 金琴飾ともいふ今貝前繪のすしを青貝は金銀銅の功今入し  
 とすそをりひてまの螺鈿字と不辨とすれハ青貝細工をんは  
 ○今葉の螺鈿ハ今俗に云青貝をすし之細工飾のすし一切は  
 の中より大層又殊師利佛刹切徳莊嚴經卷中の希蘇芳箋  
 七卷云鈿飾上堂練及顔集云以宝玉琴鈿以飾器物也下  
 昇織及考声云粧飾也文字典説修飾古今止字從中  
 鈿声音似と云くく

鈿金

相嵌

商嵌

鑲嵌

○丹鉛録

張懷瓘書録云往在翰林見古鐘二枚高二尺許有古文

三百餘字絶夏禹功績皆紫金鈿似大篆神彩敬馬人蓋三代

鈿金為篆其精類如此又李伯時得雕戈蟲鳥書黃金文銘

六字曰王用父作雕戈鈿金法今亦不傳唐六典有十四種金曰

銷金曰拍金曰鍍金曰織金曰研金曰披金曰泥金曰鏤金曰撚

金曰戩金曰圈金曰貼金曰嵌金曰景衣金面鈿金不在其中

今併其名亦不知矣

○元美曰趙布鵠云夏時器多相嵌訛曰為商嵌

○通推

以金銀絲戩器曰商謂錶嵌也用修以為欽嵌智

謂本商嵌蓋百謂刻為商商金商銀乃古元遺称也張懷

瓘書録言三代鈿金今元所謂捨金宜盒印唐之戩金也今



作去声曹昭以為刺金西鈔摘映曰倥華有鶴箋云鶴金飾貌戲金出此

揚具

まきかひ

まかそち螺鈿仕装之今倥ま貝とらふこのかひあせてうつと  
わくさそ磨出は物あるかひあふん物ひかひまうと  
個をあしもみえと

○菩薩戒記

元 正長久年八月十日まき系安樂光院

仏壇並揚具

沃葱地

いかけぢ

いりまきまきりかきまきり沃葱地のまきまきり  
又ハ別はまきまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
文庫概るとのまきまきりまきりまきりまきりまきり  
沃葱地のまきまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり  
沃葱地のまきまきりまきりまきりまきりまきりまきり

○源仲正家集

巻末

○史本抄曰

あしうや風の前のまきまきりまきりまきりまきりまきり



剔紅

ついで名推朱

○童子問 木葉而 格古要論曰剔紅器四無新舊但有硃厚色鮮紅潤堅重者为好元朝嘉興府西塘揚一匪有張成揚茂剔紅最得名但硃薄而不堅者多 日本国琢球国爰此物 ○居家必備載古枕高濂古玩器全用此論

剔紅の器は其の造りよきものありて今も天下の名器の類に計るべし其の造りよきものありて今も天下の名器の類に計るべし其の造りよきものありて今も天下の名器の類に計るべし

彫物後及代々十一代名物

- 一 祖 祐宗
  - 二 代 宗宗
  - 三 祐宗
  - 四 光宗
  - 五 徳宗
  - 六 宗宗
  - 七 憲宗
  - 八 則宗
  - 九 宣宗
  - 十 連宗
  - 十一 壽宗
- 祐宗の十乃光治宗元憲則造宣壽の分

古備前地法利新目利

底るれハ 松葉長毛 丁新島 凡宗伯十八歳

猿樂能の面 ふくいおひ

○貞治の面 ふくいおひと云ハ此等の名之 残前原に  
としふ名おひと云

入目

室曆の未の初の新に戸は細工をてひら畔の依如し白眼を思ふ  
と云ふこと或は眼を入るるの上をありしを流れて所  
よその工物ありし鼻の落たるも凡そ老けし細工より  
えの陶器儀り鞍畔録サニ聖職ノ系 杭州張存幼患一目時称張  
眼子忽遇巧匠為安一礪睛障蔽於上人比自不能辨其偽と  
有令く入目の細工云

欵識

偃蹇字

かけひるゝ字

輟軒録ナセ 古銅器鑑定系 所謂欵識乃分二爰欵謂  
陰字是凹入者刻畫成之識謂陽子是挺出者正  
如臨摹摹各自不同也云々下略所謂識紋欵紋不同識  
乃篆字以紀功所謂銘書鍾鼎夏用鳥跡篆商則貴  
魚周以虫魚大篆秦用大小篆漢以小篆錄書 三国録  
書晋宋以來用楷書唐以楷隸 三代用陰識謂之偃蹇  
字其字凹入也漢已未或用陽識其字凸向有凹者或  
用刀刻如鐫碑蓋陰識難鑄陽識易為決非三代物也  
欵乃花紋以為飾古器欵居外而凸識居内而凹夏  
周器有欵有識商器多無欵有識

○今案此文は二の志有す川神の事なり其の歎識ハ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

銅器鑑識

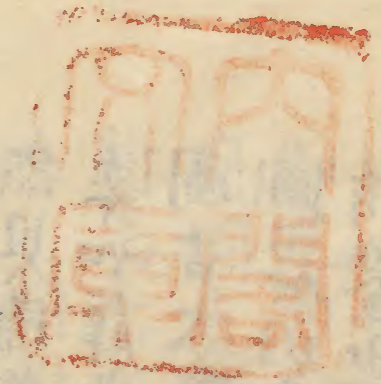
○較畊録十七古銅器 宋番易張也南宦游紀聞云辨博書  
畫古器前輩蓋嘗著書矣其間有論議而未詳明者如  
臨摹硬黃響榻是四者各有其說云云此下略辨古器則有所  
謂歎識臍茶色朱砂斑真青線井口之類方為真古其  
製作有雲紋雷紋山紋輕重雷紋垂花雷紋鱗紋細  
紋栗紋蟬紋黃目飛廉云々下畧臘茶色亦有差別言  
代及秦漢間器流傳世間歲月最久其色微黃而潤  
澤今士大夫間論古器以極薄為真此蓋一偏之見也  
亦有極薄者有極厚者但觀製作色澤自可見也亦有  
數百年前句容所鑄其莖亦精今鑄不及必竟里而矧  
須自然古色方為真古器也趙希鵠洞天清錄集古鐘

鼎彝大器辨云夏尚忠商尚質周尚文其判器亦然商  
器質素無文周器彫篆細密此固一定不易之論而夏  
器獨不然余嘗見夏凋戈於銅上相嵌以金其細如髮  
夏器大抵皆然歲久金脫則成陰窵以其刻畫者成  
凹也銅器入土千年統青如鋪翠其色子後稍淡午後  
乘陰氣翠潤欲滴間有土銹處或穿或剝並如蝸篆  
自然或有斧痕則是偽也銅器墜土水千年則純綠色  
而瑩如珠朱及千年綠而不瑩其蝕處如前今人皆以  
此二品體輕者為古不知黑大而厚者銅性未盡其重  
止能減三分之一或減半器小而薄者銅性為水土蒸淘  
亦盡至有鉏擊破處並不見銅色惟翠綠微骨或其  
中者一線紅色如丹然尚有銅聲溥世古則石曹入水土

惟流傳人間色紫褐而有硃砂斑甚者其斑凸起如土等  
辰砂入釜以沸湯煮之良久斑愈見偽者以漆調朱為  
之易辨也三等古銅並無腥氣惟士古新出土尚帶土  
氣及則否若偽作者熱摩手心以擦之銅腥觸鼻所謂  
識紋欵紋亦不同識乃篆字以紀功所謂銘書鐘鼎夏用  
鳥跡篆商則蟲鼻同以蟲魚大篆秦用大小篆漢以小  
篆隸書三國隸書晉宋以來用楷書唐用楷隸三代用陰  
識謂之偃蹇字其字凹也漢已未或用陽識其字凸間  
有凹者或用力刻如鐫碑蓋陰識難鑄陽識易為  
決非三代物也欵乃花紋以為飾古器欵居外而凸  
識居內而凹夏周器有欵有識商器多無欵有識

古人作事精緻工人預四民之列非若後世賤丈夫之事故古器  
欵心細如髮勻整分曉無纖毫模糊識文之筆畫宛々如  
仰瓦而不深峻大小深淺如一亦明淨分曉無纖毫模糊此益  
周銅之精者並無砂顆一也良工精妙二也不吝工夫非一朝夕  
所為三也今設有古器欵梢或模糊必是偽作質色臭味亦  
自不同旬客器非古物蓋自唐天寶間至南唐後主時於昇  
州句容縣置官場以鑄之故其上多有監官花押其輕薄  
漆黑欵細錐雅可愛要非右器歲久亦有微青色者世所  
見天寶時大鳳環執此極品也偽古銅器其法以水銀雜錫  
末即今磨鏡藥是也先上在新銅器上令勻然後以礬醋  
調細礬砂末筆蘸勻上候如臘茶面色急入新汲水滿浸  
即成臘茶色候如漆急入新水浸成漆色浸稍緩即變

色矣若不入水則成純翠色三者並以新布擦令光瑩其  
銅腥為水銀所覆並不發露然古銅聲微而清新銅聲濁  
而闕不能逃識者之見古人惟鐘鼎彝器稱功頌德則有識  
盤盃寓戒則有識他器亦有無識者不可遽以為非但  
辨其體質欵紋顏色真味足夫夫二書之論銅器固已發發  
然具備然清脩好古之士又不可不讀經傳紀錄以求其源  
委如薛尚功欵識法帖及重廣鐘鼎韻七卷者宜和博古  
圖古大臨考古圖王休甫堂集古錄黃睿東觀餘論董  
道廣川書跋等書皆當熟味徧參而漸之以經庶處可言  
精鑒也



Faint, illegible text impressions, likely bleed-through from the reverse side of the page.

△今葉は洞筈より多し形の盤減る較畊録ナレは委川  
くちろるをその意を以て今は方の俗名にて翻譯を

△曠余色 時代銅といふものなり 是は漢のころに  
もててころあひる是は銅の古物に三代及秦漢の間器  
流傳世間歲月浸久其色微黄而潤澤といふ是之

△朱砂斑 いさぎびといふ朱さびも有是はさびといふも  
るさびの如くぬるさびより河して朱のまじりたるもの出ま  
るは是は正地金のまじりたるもの出まるといふは今定純  
の銅也といはさびの出る人の糸の如くなるおと

△真青緑 西此金をとりたるもの如く思ふに古き  
槍の鬨子の跡ありて石とて凡るものさされて  
い色は黄く江戸大塚の老盤槍の葱室跡あり



の磨火のの落は物取しおきて今るのよるうらその  
色を黒くすくにぬれぬの如し純緑色とも云

△雲紋 へつまさく滑巻の雲字の象の如し

△雷紋 三井の回雷字の象文之田の字く

△山紋 山形へへみはく


△軽重雷紋 大小りげひある回三井く

△垂花雷紋 唐草のよ三井く

△鱗紋 ころこかこ△みは

△細紋 小紋飛くその形象も空く

△粟紋 七子石目の如く

△蟬紋 蟬の羽の挿柄の如く  石目の如く

以下黄目飛の象竹はくくての形挿柄のなりと云

○火器調度部目録

火桶繪極ひをけ 火桶 桐火桶 さいひさか

聊煙 ころみ 火櫃 ひつ

火舎 くらさ 火箱 ひびり

火盾 かしら 火籠 ひびり

火拵 ひきりなご 火打袋 燧 ひら

燒鉄 やまご 燒繪文 やまごの 燒石 やまご 温石

炭鈎 すりき 鞆 おきかえ 踏鞆 たら

△竹 けし 硫黄 いさう 引光奴 つけ

△竹 けし 硫黄 いさう 竹本

# 火桶の画極

古き火桶の繪は、古友と云たるを、澄明、赤も、修（り）り、  
相火桶ハ、後、尾院、或ハ、東、御、院、の、御、御、も、云、傳、へ、さ、ま、も、こ  
の、中、社、の、傍、と、云、く、相、火、桶、の、ま、燃、も、さ、同、一、修、極、なり  
或人云定あるなり。

それさゆり、行、た、の、原、の、あ、ら、な、し、花、咲、く、や、ま、と、ま、て、こ  
と、ら、つ、る、ま、よ、て、一、花、を、火、を、さ、る、あ、と、と、り、色、立、箱、の  
あ、ら、な、し、  
ま、あ、の、ほ、柄、子、さ、げ、る、火、桶、を、さ、り、と、さ、り、さ、す、こ、け、さ、ら、  
よ、れ、り、

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

○火桶

餅飯草お登り

○清少納言記九ぢんの火桶のりゑたるまむしはいす

○院番の火桶は和子地のまきゑたる

○同くちりりゑるさゝる火桶

○吳崎抄竹書画くゝ火桶元とゆゑい西うー或ハ竹釣元未詳

○元河内世恒画集 火桶はむうふ

あまたたえハとえあゝめらうゝ火のかさおそのゝそ何う

相火桶

○赤木集四相名は相火桶

あらかきりひとりにあゝとあらんそあ人もあさあのみすゝらハ

○源信集

天元元年十月をしののまの日のち五層の女房の火桶は餅お果物中て  
内裏の女房まつら大后の火桶いとあをせおお自金してま  
の子龜のゝと併つてはあたまをくゝりりれゝあ

わたつみのうきたる山登あよりちりこきあきとけいたけや

○源信集才のちまうくーあゝあゝ

あまゝひは火桶のあきやわきとらん越きんは河ハ忠比式

源信集才のちまうくーあゝあゝ  
あまゝひは火桶のあきやわきとらん越きんは河ハ忠比式

源信集 火桶

○ころも 脚鑪 俗火燵

○ひをり 火焔

○伊勢家諸礼も火焔と火ををきし者も書院面あきの付出よハ  
たて炭とてをきとてきてあきりき炭の両又載

○桐火桶

●源頼政は宇治川の舟に鞭桐火桶と扱石よよめと伝るる  
るがよあ

宇治川の舟のあり 為たきり 氷魚けさやうた

政 平

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

火櫃

ひびり

俗云火櫃之軒櫃のさるうーたれハソカ俗すひつとも云

○後醍醐天皇日中ゆるよとのこともあふきて扇燈ありあふ  
あつたのちを思ひ居りささひまのあまうた人既ゆだいまんよつき  
これハつぎくの人ちの戸をあてせいあきして既のきりくよ  
あつてひて次男こあつてちよはく人多れれハかひつのお  
と火櫃のしれおきて扇燈はく南厨子の扇燈をいつ  
なり

火舎 和名

○火櫃 ひびり

○明月記述保お年十月十日先是堂を童子あけり撒花簀  
運出さる指火櫃之後其まを更なる簀  
文唐一より二百有七の親氏亦辰火櫃

○火櫃

○法少烟之記九曲前ちく例の火櫃の火こちたおこりてこ

○四名集三下見よるをえんとて依保はし何よて魚をぬらして我身  
ハむらひつきの肉はあて下知一童子の傍火焚てあたる焼くま生  
たる息を焚く湯の油の何つちるまは魚を焼くまとけり魚  
かの見是とてうてまら桶のあまそきて湯よ入る

○大鏡オホキョウ 雨流アメノリ ちぢりチヂリ ちぢりありきて 陣アレイ のふとりのあゝ火  
あかりのうに 埋ウレ てる 葦アシ のあけき 火ヒ のついでて せせ籠セセカゴ 折オリ ちぎて けし  
きふふ 湯ユ 衣イ をはあつて かつて せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
ひさけ ちぢりと 振フリ て さあつて の葉ハ を せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

○大鏡 雨流 ちぢり ちぢりありきて 陣 のふとりのあゝ火  
あかりのうに 埋 てる 葦 のあけき 火 のついでて せせ籠 折 ちぎて けし  
きふふ 湯 衣 をはあつて かつて せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ  
ひさけ ちぢりと 振 て さあつて の葉 を せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

後籠

あやこ

伏籠

洞籠

○白氏文集ハクシヤウシツ 三 秋雨夜眠アキノアメノヨノネ 律 凉冷スズシ 三秋夜安アキノヨノヤノアス 間一老翁マカヒノオウ 臥シ 遅燈オソヒ 滅ス  
後暎アトノキ 美雨ミアメ 声中ノナ 灰宿ハイヤク 温瓶オンビン 火香ヒカウ 添暖ソノノ 被籠フキカゴ 晓晴アサノハル 寒未起サムク  
霜葉スユキ 滿階マンカイ 紅ベニ

○大鏡オホキョウ 五 宋院ソウエン 左大將サダマシ 阿ア けきて 陣アレイ のあけり 冬フユ は 火ヒ ありて  
かま埋カマウレ てる 葦アシ のあけき 火ヒ のついでて 後籠アトカゴ 折オリ ちぎて 二瓶ニビン ちぎる  
湯ユ 衣イ をはあつて かつて せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ せせせせ

尉火斗

ひり

○晋書韓伯傳 伯年教歲至大寒母為作襦令伯提尉火斗而謂之曰且著襦尋當作複禪伯曰不復復火在斗中而柄尚熱今既著襦下亦當煖

○南史梁武帝紀 魏攻司州甚急亦明遺王廣之赴救帝為偏師行次尉火斗洲有人長八尺餘容貌衣冠皓然皆白緣江呼曰蕭王大貴

○北史李渾傳 尉遲迴反于鄴時李塹在并州隋文帝甚慮迴遣渾葉驛詣穆、遼令渾入京奉尉火斗曰願執柄以尉天下也文帝太悅

○淮南子 糟丘生于象箸炮烙始于尉火斗

○梁簡文帝詩 尉火斗金塗土色簪管白牙纏

斗熨

の

ひの

熨斗

○大境才ふたをよ上むりろは縁入てそ去りせむりせよふ寐の  
時ハ大なる斗熨持する女房三四人そりり出きてるをよのこ  
りむりろとバあそくたのりあそくれ寐させむりゆふ

○晋書才 韓伯傳伯教歲母為作禰會提尉斗曰且著禰尋  
當作複禰伯曰不復復火在斗中而柄當熱今既著禰下亦當  
暖

○白氏文集才四 新樂府縹綾

廣裁衫袖長製裙金斗熨

波刀剪紋

○月才十六閑遊江郭詩

西日韶光畫南風暑氣微

展張新小簞熨帖旧生衣

金斗熨波 同上 縹綾 廣裁衫袖長製裙金斗

熨波刀剪紋

白氏文集新樂府才四

付竹

つげたき

硫黃

ちりり

○源平成血表記

圓滿祝太輔光山院系圖 滿院太輔院

付竹硫黃をよ用て火お袋を去つらひ入か  
ちとけり考法師は遠うなりて山門へこそ思ひのれ

○思得時等

二思業付竹と云ハ今世云わくちと云子之

硫黄ハ今世云付木とよ受之るらちハ竹子の自然

は枯たど昔ハ用ひしとよ田舎さそハ今も用ひたり  
磯人よの傳まわのみて第付木河さあ体と繪を

その云宗書よ不のうのと云き  
は火お付竹室螺貝付しと云之



火筋

ひびき

火箸

○丸の内新恒集

ひびき

きまきハとけおるんそのあゝ君ヲそよりしあり  
今葉に冬 さらけあはれんよあゝのあゝの  
あゝあゝあゝあゝ火桶もすてられてかゝり  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

丸の内新恒集  
ひびき

丸の内新恒集  
ひびき  
火箸

不ろそ 火屑 今ハむらりといふ火糞

○ 齋集ちりこりかかおのつらひそりよかひの火お不  
くそちんとしてとすりたる布の代名

うちつけと思ひつらやあひの志のおあつてまねく之けり

今葉よあくそハ火糞まで又火屑もあへり  
くそこらむとたれ五りり万葉集ハ本糞其本屑を  
たよこらむと訓り又今倍ハ船泊の今くそといふ所り  
是も屑くまも今倍よあくそといふハ火口の志よて  
火の付へきくらあまの丸戸の志よ同く山  
あといふも猪神の志より名付たり又ハ朽木ハ火  
のつくこらむおそを回舎よてハ今ハ朽木と火くら  
は用われハ火柄の志よていふ也

火お

ひらち

燧

○ 敷若集ちりこりかかおのつらひそりよかひの火お不  
くそちんとしてとすりたる布の代名

うちつけと思ひつらやあひの志のおあつてまねく之けり

○古事記

解用其姨倭比賣命之所給鬘口而

見者火お有其鬘於是先以其御刀剗撥草以其火  
お而お出火著向火而焼退還出皆切滅其国造等

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

○ひろ

燧

○白虎通一謂之燧人何鑽木燧取火教民熟食美良人利性避臭去毒謂之燧人也

○淮南子<sup>十七</sup>說林訓凡用入之道若以燧取火疏之則弗得疏猶教也教之則弗中教猶疾也正有疎教之間得其節火乃生

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

燧 曰

ひきうらそ

燧 杵

ひきうらそ

火とあるは、大槌の臼と似り、向の杵をく、誰とりむ極、  
され火物、く、四、ハ、柄の斤錫とく、わめて、横、杵を、入、て、  
ハ、こ、こ、り、火の物、れ、火、を、と、り、こ、よ、り、火、の、く、これ、  
傳の秘、る、く、き、く、ハ、柄、を、同、く、何、つ、の、か、り、し、り、

○古事記上櫛八玉神化、鵜入海底、吐出底之波、速作天八十昆良、

迎而鎌海布之柄作燧、曰以海尊之柄作燧杵而鑽出火云是

我所燧火云々

○古事記上、櫛八玉神化、鵜入海底、吐出底之波、速作天八十昆良、

○古事記上、櫛八玉神化、鵜入海底、吐出底之波、速作天八十昆良、

燧 儀 名

ひきうらそ

火打袋

○古事記 日本武命

○軍器考卷八、釵刀類、佩服、約、考、を、せ、了

○軍器考卷八、考、を、

○武林原始考、考、を、

○燧袋、夜、考、を、

○燧袋、夜、考、を、

○燧袋、夜、考、を、

○字考、火打袋、ハ、四、十、の、後、さ、ら、な、り、れ、も、晴、の、町、ハ、評、列

○カ、ハ、靴、卷、下、結、を、ハ、ひ、き、め、り、結、火、打、袋、を、

一本、ハ、説、話、集、に、ハ、語、り、



○左京公おとよ 吳弁 いろいろ人たつ人よ 白き袋をとらさおしそ  
まうて火打とてうそてやして

ころんていおひおと 我常の志のふるあしてはれつたりけり  
○今葉は 家教集との日る月りつれあえりらと

○後撰集十九難の とき西へまうりけるなごらう火打おそへ  
てつりけり しみ人いふに

このたひも 我をいふれぬものあうハおえんえよおひおなん

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "Okura" and "Dokuro".*

○おのを京十 古き軍書は火打袋付つるちかとりあつり  
思き袋と三角の他く甲の礮の粉を包たる袋を入り  
いづりつけぬをこぞまてこめそのつけぬのびづり白地  
の袋を捲つり細子の火打のぬく急あつ時は紛れど  
るたり人と切て血を拭ひ礮粉をぬきり残取あつた刀  
一の結白あたりけり けりハ左ちつろをあハ林の中教言場の方  
あるお林の中よても人と切ち渡のあなれハ赤免のあし  
まゆりてちか刀の付一之軍中へハ赤免に及ぶハ幡右那  
あつ奥州へ下りれそのすも先林の中ハ赤免をなつて  
る何ち刀を付つる火打袋と陳のたは解あてかりし  
とあつる赤免の火打袋なるぞ

○今柳は びるのあうきたつるちか書はえ之ぞ  
三角なる袋を付つハ今倍の細子たのちおとつりあひ



こころの力は鼠の皮の火お袋をさけ

○大平記 火お袋通釈抄 青磁瓦の箱に入て出仕し  
けるに火も燭袋に入て持て了残を十文にさしつゝ河  
へ流しつゝ

○同上 師を自害り余 句もあつゝぬお袋にて師を入道  
道常師茶入乃道縁とてお袋をいぬ提鞆さけて後  
人よぬてお袋いぬる人毎に丸強しぬ

○更得の事ニ火お袋梅々に採素をの葉は葉袋とて  
さけさやとけり是はしぬ家の指芽の中息付て指を  
提鞆といふ ○我祖母繼し火お袋有りたの割丸く  
しけかりを付し袋を葉袋の採素をの葉袋とて  
鞆に付てさざらとをさけさやといふは同一にぬ

やきりり

焼狹

やい志り

○前漢書 廣川惠王傳去即與昭信從諸姬至望卿所羸其  
才更擊之令諸姬持燒鉄共灼望卿

燒袴文

やきあひん

○奇吳雜語集才一 やきあひん又云く唱食系履をぬいて縁  
よけりあひんその系履をぬきやきあひんを立ててんり  
やきあひんの系履有えれは唱食のさしは燒袴支やきあ  
れさあひん



焼石 やきい

あんどく 温石のゆき

○大境オニ左路石匠時平一男八条大納保忠もろせのひまきじ  
 けち折八条すすくは押さずありあわいとるるうたはま  
 いくありされえの録ひのいとありきなるをむ一つちひた  
 きと二つ焼て焼石のやうは焼身はあはれおろくうらりぬ  
 ならぬあまきとひよりたなきなるを中よりうて馬車そひまふ  
 けしやあひけるありなるは自らあがりそりそのせも身  
 とありて人のあひれはこそくそ焼へまくだめ

○平家物語

炭釣

まきかき

炭をかきあはれに急ぐおまて火かきとよおに戸まては倍  
 一作干能といふ又これをも葛拾能なりそれか又そのお  
 ともりあべく足おれと又釣るるよれハ炭<sup>ト</sup>取のぬくあり  
 おと見おれハ炭かきといふおろん又字書すよれハ念もさ  
 ことも足お

○和名抄 坂垣具 炭釣陸詞切

云 銘 音歌和名 炭美加波 炭釣也

○字彙 銘余六切音育 釣銘取炭器也

○芥子園画傳集 芥子園の船匠火をりて 地の顔よとあそ  
 きハ妻の顔よ 徳物来し 山上磯人二人の船匠有  
 夏の比織をありてあいうと吹利力小刀となりしし川  
 舟の舟の炭のくま少化へはて有て亭をむらあまり

火をくわしてきて是をわくはきりかかれて又来た又逐へ又志  
かかれて又来た亭主炭りきの金の光を赤く焼く蛇の  
額を忘るれ、蛇をわけて再び来た

鞆

和名 鍛冶具  
あきかえ

踏鞆

和名  
たまり

○閑居友

下巻

今にて海は入なんとせし時、焼石硯をどおとこりて入て  
志がめあして今とせしつづきをよりて

○今葉

入あしうんとて石を懐に入てあしう

のちて平家お徳のあは天皇御入あのあるこの中  
あたり志うながういあふ久甲子の比誰人うやあ  
あふの隠者のあたるそのよて少東あきまのゆきあ  
やうかの平家お徳ハこの後にあしうのなれはあ  
又をせぬまや御なういあも歌あはぬ人のあ

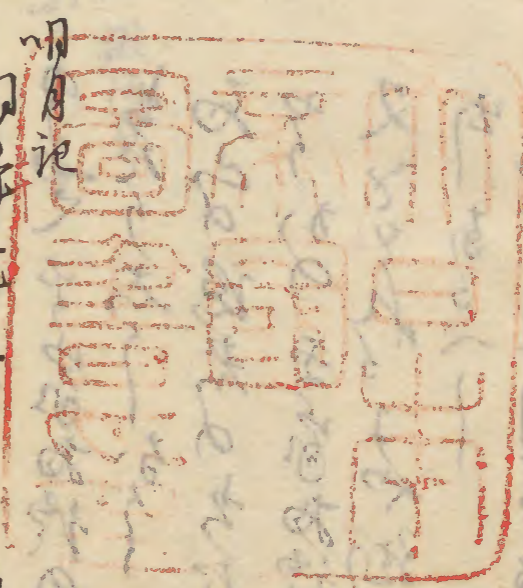
出ああべー

○十訓抄

卷二七 佐判官送清といふものあたりき

かくたび  
くお作せさかりともいふうやまぬゆんゆきをあは  
らんよつこいひまうあてあ前あうきこゆのそりあ

月の云のつくりしりくどりて焼るありきらすとて  
ひちあきさうゆをいそせよんハ



燒石

○曰上心作元年十月八日入秋泰大炊取云々  
被衣而燒石之石  
火ツケレ出云々之石

